

「ざつと」言えた

クラスの中で、読書感想文の発表会をしました。その中で広樹さんは、自分がいじめられていたことを話しました。

じつは、ぼくも前にいじめられていました。今はいじめられていないけど。ぼくも、いじめられてがまんして、がまんして、ようやくいじめからかいほうされました。ぼくは、いじめられているときは、自分がみにくい人間だと思っていました。

ぼくは、前の学校でもいじめられました。ここに来たらいじめられないかと思ったのに、やっぱりここに来て、ぼくはいじめられました。ぼくは、いじめられるうんめいで生まれたのかもしれないと思っていました。でも六年になったら、いじめもあまりなくなりました。

ぼくは今、顔ににきびができています。六年生のなかまたちは、ぼくの顔を見ると、すぐにいやな目で見てくるときもありました。でも、今でもぼくの顔にはにきびがあるけれど、あんまりみんなも気にしていないからよかったです。

ぼくは、この学校に来てから、いつのまにかいじめられていました。さいしょのいじめは、あまりすくなくあったけれど、だんだんいじめがはげしくなりました。なんでぼくだけ、いじめられているんだろう？ぼくは、こういう気持ちでした。

ぼくは、前の学校よりは、この方がいいと思いました。だって前の学校は、暴力や石をなげられたいじめとかいっぱいされていました。でもここでは、暴力や悪口とかだけやから、まだいいと思っていました。五年生の時はいっばいいじめられていたけど、六年になって、少しはいじめもなくなりました。ぼくは今、じゅんちようにやっています。

いつもはたくさん話をしない広樹さんの言葉を、みんなは物音一つ立てずに聞きました。

広樹さんが言い終わると、自然とはく手がわきおこりました。

すると、先生は言いました。

「広樹さんは、ぜんぜんみにくくないよ。本当にみに

くかったのは、だれだと思う？」
みんなは、あつというような顔をして、いっせいに下を向きました。

その後、それぞれが自分と広樹さんのことを話しはじめ、広樹さんにあやまりました。

最後に、一番強く広樹さんをこうげきしていた正和さんが言いました。

広樹が、五年生の時にてんこうしてきた。初日は、えんそくだった。そのときは、いっしょにひるごはんをたべた。それからふつうに学校生活をおくっていた。

だけど体育ごうかん会るとき、いきなり松のえだのところがたぶぶんをぼくになげてきて、目の下にあたった。そして、広樹はにげていった。広樹は先生に

「なんでそんなことをしてん？」
と聞かれて、

「なんもしてないよ。」
と言った。みんなが見ていたのに…。

それから広樹は、みんなからきらわれた。今まで、ぼくたちは広樹をけつたり、悪口を言ったりしてきた。だけどいっぱい広樹のことやクラスのことを話し合って、今はほとん

ど、広樹にそんなことをしている人はいない。前は、ひどいことをしたり、いったりしていたなあと思った。

先生が、

「広樹さん、そんなことあったの？」

と聞くと、広樹さんがゆっくりとうなずきました。

「そんなら、あやまらんんなな。」

と言うと、広樹さんは立ち上がって、「ごめん。」

と頭を下げました。すると、

正和さんもしっかりとうなずきました。



「やっと言えた」(小学校高学年向け)

A 教材設定の理由

いじめは、いじめる側がいるからこそ生まれるものです。そこで、いじめが起った時、担任はまず弱い立場の子に気持ちを書かせます。教師も決して傍観することなく、弱い立場の子を支える側にいなくてはなりません。

しかし時には、いじめられている子を教師が守ろうとするあまり、いじめる側の子の背景に思いを寄せることができずに、いじめる側の子を追い込み、ますますいじめや荒れを深刻化させてしまうことがあります。

広樹さんと正和さんの関係も、担任が広樹さんの側につけばつくほど、正和さんは追い込まれ、正和さんは担任から離れていきました。荒れている子、いじめている子にも、背景があり、彼らも聞いてほしいのです。

しかし荒れの大きい子ほど、そのことをすぐには言い表したりはしません。ゆつくり時間をかけて本人と話し合ったり、保護者と話し合ったりし、まっすぐに向かい合った関係を作り出す必要があります。どの子も、自分が受け入れられると感じた時に、話し始めるのです。

さらにクラスの中にも、彼らの本音を真摯に聞き取る関係が作り出せているかが肝心なことです。傍観者と言われる彼らも、いじめる側にいることを自覚させ、お互いを大切に思う関係を作り出さなくてはなりません。

つらさや深い思いを聞き合う中で、自分のしたこと、言ったことを見つめ直すことによって、互いのつらさ、弱さに心を寄せ合う、支え合う仲間が作られていく。そんな子どもどうしをつなげる営みを作り

だしていききたいものです。

B 教材の解説

本教材は、小学校六年生の学級でのとりくみを元にしている。

五年生の時に転校してきた広樹は、クラスの中で関係が作れずにいた。さらに正和に向けて、落ちていた松の枝を投げつけてにげってしまったことがきっかけで、ますますクラス中から居場所をなくしていった。一方、正和は、自分の顔に向けて投げつけられた松の枝のことが担任にきちんと取り上げてもらえず、広樹や担任、さらには学校生活に不満を表すようになってきた。そして、クラスも騒然となってきた。

そこで六年生の担任は、まずクラスで一人になっていた広樹の居場所づくりにとりくみ、担任と広樹との関係づくりを行っていった。広樹は、少しずつ話すようになってきた。

さらに正和や周りの子たちとつながっていきたくてとりくんでいく。しかし荒れの中心にいた正和やクラスの子たちの思いをもっと知りたいと思いつつも、広樹の側につけばつくほど、子どもたちの心は離れていった。

二期になり、事あるごとにクラスのこと、自分のことを一つ一つ書きつづり、読み合うことを続けてきた。すると、少しずつ広樹がいじめにあつていられることを話し始める子が出てきた。さらに自分がいじめる側にいたことを話す子や広樹を攻撃するクラスの仲間のことを話す子も出てきた。いじめの中心にいた正和は、クラスの中では追い込まれていった。正和の荒れはひどくなる一方であった。自分の思いが通らないと広樹に当たり、そして周りに当たり散らしていた。

そこで担任は、正和の家に行き、両親と正和とじっくりと話し合った。そして、正和を中心に据え、とりくみを進めていった。正和にも真正面からぶつかって、関わっていった。少しずつ正和も思いを返すようになってきた。正和も落ち着いてくると、広樹はいじめられなくなった。

そんな時にクラスでとりくんだ読書感想文に、広樹は自分の気持ちを書いてきた。これまで二、三行しか書かなかった広樹の思いにクラスのみんなは、息をのむような感じで聞き入った。広樹の感想文に対して、広樹をいじめていたことをわびる言葉が続き、「立場が逆転した。自分の方が、よっぽどみにくいんだ。」と返した子や自分が一人になっていったときのつらさを初めて話す子がいた。

そして正和が、心にいつもひっかかっていた物を吐き出すかのように話をした。すると、これまで言い争うことしかなかった広樹と正和が、素直に担任の話に耳を傾け、広樹は正和に謝った。

これから後、広樹が休み時間も友だちとふざけあったり、大声で笑ったりする場面が見られるようになった。さらに正和と広樹が、腕相撲で手をにぎり合って勝負する場面も見られた。だんだん周りの子と広樹の距離が縮まっていった。正和も自分の荒れについて振り返るきっかけになっていった。

C 支援の内容

①心にとめた思いは、深ければ深いほどなかなかすぐには出てこない。それぞれの思いを受け止めることのできる仲間作りをめざしたい。

②この発表会は、子どもたちが自分の思いを何度も話し合っただけでなく、クラスの関係が基盤になっていっていることをふまえて、授業にとりくんでほしい。

③子どもたちから出された思いを子どもたちの中にきちんと返す（重ねる）ことによって、子どもたちの思いをつなげていきたい。

そこで一時間で返しきれない場合は、次の時間へと指導を続けたい。

D 参考資料

・ 第五二回全同教大会（二〇〇〇年度）報告

「Mとの関わりの中から教えられたこと」

清水 正樹（辰口町立和気小学校）

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	学習内容・支援の要領
<p>1 導入</p> <p>①友だちに言いたかったけれど、言えなかったことはありませんか。</p> <p>2 展開</p> <p>②プリントを読みましよう。</p> <p>③いじめられていたことを話した広樹さんの気持ちを考えよう。</p> <p>④みんなが「いっせいに下を向いた」のは、どうしてだろう。</p> <p>⑤正和さんが自分の思いを話した時の気持ちを考えよう。</p> <p>⑥正和さんが、しっかりとうなずいた時の二人の気持ちを考えましよう。</p> <p>3 まとめ</p> <p>⑦自分のことやクラスのこと、今まで言えなかったこととはありませんか。言っても分かってもらえなかったことはありますか。(書いてみよう。)</p>	<p>①無理に出させるのではなく、「これまでと言えなかった」ことがなかったか、心に留めておければよい。</p> <p>②範読する。</p> <p>③広樹さんが、みんなの前で自分の思いを言うまでには、周りの子どもたちとの関係がよくなり、自分の思いを受け止めてもらえるクラスになってきたことを伝えたい。</p> <p>④みにくかったのは、いじめたり、傍観していた人たちだったことに気づかせたい。</p> <p>⑤周りの子どもたちがあやまる中で、自分がどうして広樹さんを攻撃するようになったかを問い返し、心の中にため込んでいた前の学年の出来事を話し、自分のことも分かってほしいというメッセージに気付かせたい。</p> <p>⑥二人が分かり合えた時の気持ちを想像させたい。</p> <p>⑦いじめていたこと、いじめを傍観していたこと、いじめられていたこと、先生や親に認められなかったこと、その時の思いを書いたり、発表させたりしたい。</p>